

## 議事録

平成 29 年 第 12 回建設トップランナーフォーラム

地域建設業は想定外の災害にどう備えるか

日時：平成 29 年 7 月 4 日（火）14:00～18:00

場所：イイノホール RoomA（大会議室）

### ○開会

建設トップランナー倶楽部幹事 丹羽庸介

- ・皆様、本日は大変お忙しい中、お暑い中お集まりいただき誠にありがとうございます
- ・定刻となりましたので平成 29 年第 12 回建設トップランナーフォーラム「地域建設業は想定外の災害にどう備えるか」を始めさせていただきます。
- ・本日の司会を務めさせていただきます丹羽と申します。
- ・それでは、今回のフォーラムの趣旨説明を建設トップランナー倶楽部代表幹事 米田雅子にお願いします。

### ○趣旨説明

建設トップランナー倶楽部代表幹事 米田雅子

- ・本日は国土交通大臣、農林水産大臣はじめ関係省庁、自治体、大学、地域で頑張る建設業の皆様など、多数の方にご参加いただき誠に感謝申し上げます。
- ・日本では想定外の災害が多発しています。地震が少ないところで大地震が起きたり、北海道や東北で台風や豪雨災害が増えたり、また、大きな火災も発生しています。
- ・建設トップランナー倶楽部は、これまでインフラの町医者を目指して、社会インフラを守り、副業により雇用を守ってきました。
- ・建設業は、近年では防災における役割が増えています。本フォーラムは想定外の災害に焦点を当て、これまでの教訓を活かして、地域建設業は想定外の災害にどう備えるべきか、事例発表をもとに議論いたします。最後までよろしくをお願いします。

### ○来賓挨拶

①国土交通大臣 石井啓一

- ・第 12 回建設トップランナーフォーラムの開催にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。
- ・昨年の熊本地震、北海道・東北に大きな被害をもたらした台風による水害など、数多くの災害が発生をいたしました。被災者の方々が一日も早く日常の生活と生業を取り戻し、復旧・復興が成し遂げられるよう国土交通省も総力を挙げて、取り組んでいるところでございます。
- ・これも昼夜を問わず応急復旧工事に取り組まれるなど、地域のために献身的に活動されている皆様のお力があってこそと、心より感謝を申し上げます。
- ・建設業の使命は、国民生活や経済活動の基盤である社会資本や住宅の整備・維持管理を通じまして、国民の安全・安心を支え、経済社会の発展に貢献することです。

- ・一方、現場の技能労働者は約 330 万人のうち、55 歳以上の方が約 1/3 を占め、近い将来これらの方の大量離職が見込まれる中、中長期的な視点に立った担い手の確保・育成に向けました「働き方改革」と「生産性の向上」が重要な課題となっております。
- ・このため「働き方改革」といたしまして、設計労務単価の引き上げなどによる適正な賃金水準の確保、社会保険への加入促進、建設キャリアアップシステムの構築による技能労働者の処遇改善などの取組を進めているところでございます。
- ・また、若者や女性にとって希望の持てる職場となるよう、例えば適正な工期の設定や週休二日の推進など長時間労働の是正に必要な環境整備に向けた取組も積極的に進めているところでございます。
- ・一方、「生産性の向上」といたしまして、国土交通省では本年を「生産性革命・前進の年」といたしまして、全ての建設生産プロセスで ICT 等を活用する「i-Construction」の取組等を更に前に進めて参りたいと存じます。
- ・これからも「地域の守り手」である地域の建設業が使命感や誇りを持てるように、給料が良く、休暇が取得でき、将来に希望が持てる、「給料・休暇・希望」の新しい 3 K の魅力ある業界となるよう取り組んで参りたいと思っております。
- ・結びに、フォーラムにご参加いただいた皆様のますますの御発展と御健勝を祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。

## ②農林水産大臣 山本有二

- ・日本の過去の土木行政に関する政治に過ちがいくつかあったと確信しています。
- ・1 つ目は地方にお金をかけなかったこと。このことにより、首都に人口や価値がすべて集中してまいりました。アジアの主導者が来たときこの話をすると、皆さん頷いて帰られます。間違いなく世界標準から日本が劣っている部分だと思っています。
- ・2 つ目は 1929 年世界恐慌の後、1932 年に高橋是清が農商務大臣だったとき、予算を彼が自分で作っていますが、一般会計予算の 16% が農業土木でした。彼は「軍事費よりもっと民生費を高くしたい」「一番不況の時には、一番不況で空いてしまっているところにしっかりとした基盤整備をしたい」と考えたわけですが、やがて 2・26 事件で軍部に屠られてしまいました。もしこういうことにならない日本であったならば、今の日本の姿かたちはもっと違っていたのではないかと思います。
- ・私は高知県に住んでいますが、高知県黒潮町の地方防災会議の津波想定が 34.4 m と発表されました。しかし、黒潮町の役場も消防署も、ありとあらゆる住宅が標高 34.4 m 以下にあります。34.4 m の津波が来ると言っておいて、政府はお金もなんにも出しません。農地を高台に移転しようとしてもそんな制度は無いといひます。こういうことが日本の常識なのでしょうか。わたしはおかしいなと思ひます。
- ・しかし、黒潮町長はうまいこと考えました。四国横断自動車道は今現在工事をやっておりますが、その高速道路本線を 34.4 m よりも高くしました。高くしたその残土で谷を埋めて、そこに役場や消防署を移転しようと考えました。こうした、地方のアイディアで今までなんとかやっています。
- ・しかし、地方のアイディアだけではなんとかならないことが最近あります。高知では 680 km

の海岸線に、室戸と足摺が挟まっていますが、室戸と足摺では、もはや建設業者の皆さんの収益が落ちています。収益が落ちることによって、建設機械がリースに変わっています。建設機械がありません。特にユンボがありません。

- ・そうすると地震で家屋が倒壊したといったときに、機械がないのにどうやって救済するのでしょうか。「役場が持てばいいじゃないか」という声もありますが、役場がそんな稼働率の悪いものを所有して大丈夫なのかと私は思います。
- ・そういったことを真剣に皆様に考えていただかなくてはいけないと思うし、私どももそれをしっかりやっていきたいと思っています
- ・そういう意味を込めて、本日の建設トップランナーフォーラムにお集まりの皆さん一人一人に、大きなこの国を変えていく知恵を出していただきたい、ということをお願い申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。

### 【第1部 災害時にどう備えるべきか】

アドバイザー：元国土交通事務次官 佐藤直良

元農林水産事務次官 皆川芳嗣

○北海道・台風豪雨災害への対応 齊藤井出建設 北海道

○糸魚川大火災における対応 後藤組 新潟県

<アドバイザー総括コメント>

(佐藤直良氏)

- ・二人の発表者の方が苦しみ、悩み、歯を食いしばって頑張っておられる。
- ・3月11日は、家族が亡くなった方も地域のために頑張って使命を果たされたが、残念なことは、いつまでこのようなことを繰り返すのかということ。
- ・過去の大火の教訓を活かさず、なぜまた同じことをくりかえすのか。もう一度一人ひとりで建設業や農林の方が声を強くして、50年・100年後に記憶がなくなっても、何を思われるのか、もう一度この場から意識を高めて行って欲しい。
- ・今回のパワーポイントは役所が作るものより、思いが入っていて素晴らしい。
- ・地域のホームドクターは、地域に住んで技術や人をもっているので大変心強い。
- ・北海道で防災運動会をしようということになり、市民を巻き込んで楽しもうと始まったが、これが全国に広まったかどうか。
- ・3月11日は想定外のことで、土木学会でも考えつかなかったことであるが、想像して考えていくべきである。
- ・これから、政治家の先生方に地域のことをしっかり理解して発言していただき、和を広げて、この会場の皆が立ち上がって50年後に感謝される立場になればと考えていますので、一緒に頑張りましょう。

(皆川芳嗣氏)

- ・お二人の発表に地域に対する愛情が溢れていて大変感激いたしました。
- ・今日の全体のテーマとして、想定外の災害にどう備えるかとありますが、私自身、災害がある度に想定外と思っていることを反省しています。
- ・私の個人的な体験を申し上げますと、阪神大震災が起こる前に3年間神戸に住んでいました。国が

らの出向で県庁に勤めていたのですが、その間全く体感地震がなく、東京へ行く度に東京で地震にあっていたので、神戸は地震がない街だと本当に信じ込んでいました。そんな中で阪神大震災が起こったこと。

- ・もうひとつは、私の生まれは福島県のいわき市なのですが、そこの浜に住んでおまして、そこは東日本大震災の津波の被害にあったわけですが、私が生まれて以降の地域の人間は津波は来ないと思込んでいました。
- ・平成28年4月に熊本地震が起りましたが、その前の2月に熊本に行き、熊本県庁の人たちと話をしたり、道路局を隅々まで見せてもらったりしたのですが、当時の熊本県政は、「ここは地震の発生確率が一番低いので、企業誘致をしています。」とおっしゃっていました。そういった中で震災がありました。
- ・地震は日本にいる以上どこでも起こりうる。
- ・先ほどの発表にありましたが、北海道では今回のような水害は今までになかったと思います。
- ・なかった災害が頻発するようになっている。
- ・3年前の春に豪雪が降りました。非常に湿った雪で山梨では1メートル以上積もりました。ハウスの災害だけでも500億を超えた災害でした。そういった雪が降るということもまさに想定外として我々は認識しているのですが、どうもそうではない。
- ・地震災害も気象災害もどこでも起こる。
- ・更に言いますと、後藤さんの発表された火事というのも度々起こっている。
- ・その辺が我々の中にどの程度記憶として残って、常に備えていくという風になっていくかどうかというところが、我々に問われているのではないのかと思います。
- ・ただ、常に備えるということになると、どうしても常に備えられるだけの体系が各地域にあるのか、といった問題を含めて解決しなければならない。
- ・誰がそういったことに備えてくれて、更には何か起こった時に対応してくれるか。
- ・本日、山本農林水産大臣が農林水産省の所管とはまったく違う話をされて、私もびっくりしたのですが、地域を支える人たちが常にどうやって存在しえているのかということに、我々はもう少し議論を進めていかなければならないのかと思いました。
- ・いずれにしても、お二方が大変地域に対して愛情を深く持っておられる、特に斉藤さんの農地が失われるということがいかに大変なことなのか、歴史が失われることだということを理解されていることに大変に感銘を受けました。
- ・最後に後藤さんに一言、これからのまちづくりは大事ですが、まちづくりにおいて難しい課題としては、木という燃えやすいと言われる素材をどうやってこれからも活かしたまちづくりをしていけるのか、特に色々な技術が開発されて木材を使いながらもできることが増えていますので、是非技術の粋を尽くして、かつての町並みを活かしながら、糸魚川らしいまちづくりをしていただければと思いました。よろしく願いいたします。

## 【第2部 複業による地域の保全】

アドバイザー：国土交通省 大臣官房建設流通政策審議官 海堀安喜

農林水産省 大臣官房危機管理・政策評価審議官 塩川白良

○農林業再生による奥飛驒の保全 和仁建設 岐阜県

○農林水産業再生による隠岐島の保全 吉崎工務店 島根県

<アドバイザー総括コメント>

(海堀安喜氏)

- ・建設産業政策会議において、今後10年間の建設業について検討し、取りまとめがなされたところ
- ・「地域の建設業」は非常に重要な役割を持っている。災害対応や維持管理等を継続していけるのか。地域で一体的に担ってもらいたい。
- ・機械と人手は有しているもので、規模は小さくても、多角的に複数の事業を進めることが根を張ることにつながる
- ・国土の管理上、所有者不明の土地について省内で議論している
- ・地元で守れない土地を、誰が管理していくのか。耕作放棄や干ばつなどで荒廃の恐れのある土地をまとめることが重要
- ・隠岐でも多角化や雇用の面で工夫されていることに感心した。経費を国が出せかどうかの課題はあるが、工夫して維持管理と発展に協力していきたい

(塩川白良氏)

- ・昨年度は、熊本地震や北海道の台風被害など大きな災害が多かったが、現場応急対応などで建設業の力が重要であることを改めて感じ、また復旧が進んでいるのも建設業の力の賜物である。まずはこのことに御礼を申し上げたい。
- ・(吉崎工務店の発表に対し) 中山間地・離島では一次産業の存在が大事である。これがなくては地域が成り立たないし、防災力が低下してしまう。国としてもしっかりと支援していく考えである。
- ・(和仁建設の発表に対し) 会長とは旧知の間柄であるが、ラジコン除草ボート「草取まつお」くんの由来(「草刈正雄」に会長の名前「松男」をアレンジしたもの)は、今日初めて知った(笑)。可能な範囲でPRに協力したい。
- ・(和仁建設の発表に対し) ICTの活用は農林水産分野でも進んでいるが、「稲作業管理マニュアル」や「稲作業生産原価マニュアル」など、一農業法人であれだけのものを開発されていることには敬意を表す。
- ・建設業者が農業の発展に取り組まれていることは大変ありがたい。感謝を申し上げて意見とさせていただく。

### 【第3部 災害対応における新しい動き】

アドバイザー：国土交通省 大臣官房技術審議官 五道仁実

内閣府 大臣官房審議官 伊丹 潔

○東日本大震災後の仙台市地域防災協定 深松組 宮城県

○無人飛行機で災害現場の撮影 山崎建設 新潟県

<アドバイザー総括コメント>

(五道仁実氏)

(深松組の発表について)

- ・地域の建設業の方々が一番初めに現場に入って、道路警戒をし、がれき処理をし、それでようやく自衛隊や消防の方が入っていける。国民の皆様が目にも留まらない一番初めのところを皆様に担

っていただいている。

- その中で、今日のしっかりとしたマニュアルに基づいたものをされているので、このことが他の地域にも役に立つことだと思います。
- 地域の建設業は非常に苦しい中で、災害対応というのは、通常の仕事をして、企業活動の儲けが出た上で、災害や除雪のときにもしっかり対応していただくためには、それなりの体力を持った企業でないとできていかない。
- 我々として考えていかなければならないのは、地域の建設業の方々がしっかり活動できる、経営計画を立てるためには、どれぐらいの仕事が、どんな仕事か、どれぐらいあるのか、長期的な見通しや維持管理がどうなるのか示されないと、経営についての資材の投資も人材の投資もできていかないということだと思います。
- そういう長期的にこの時期にどれぐらいの仕事があるのか示されていないのが課題であると思っています。地域の企業の方々がしっかり仕事をし、利益を上げ、それでまた災害対応ができていくというようなことを見通しを示すということも我々していかなければならないのかなと思います。
- いずれにいたしましても、地域の建設企業がいなければ災害対応ができないという、国の宿命がありますので、そうゆうところについては、我々としても入札契約の方式や設計の積算のあり方について考えていきたいと思っています。

(山崎建設の発表について)

- 実演もあり実感できたところがあります。新しい技術はすごい可能性がある。UAV 一つでも建設生産プロセスの中でも測量、調査、設計、施工、維持管理で UAV は使えるということでもあります。
- 我々も i-construction ということで生産性を上げる、働き方を変えていくことをやっております。一つは担い手の確保、働き方改革と言われてはいますが、建設の仕事の中身を変えていくことによって、若者も女性も高齢者も働けるような、建設業にしていきたいというのが i-construction でございますし、今日お示ししていただいた、UAV も可能性が非常にあると思っています。
- UAV だけでなく、開発された新しい技術がどんどん建設の現場に入ってくるようなシステムにしていきたいと思っていますので、今、課題があることについてはお話をさせていただきながら、我々は基準を変えるということについて柔軟にやらせていただいているところでございます。基準ひとつを変えれば新しい技術がこんなに入ってくるんだということにも取組んで参りたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

(伊丹潔氏)

(深松組の発表について)

- 危機管理組織の一翼を担っていただいている。
- 行政との2者間での協定ではなく、複数の機関の役割分担の枠組みを用意され、広がりを持っており、先進性があると感じた。

(山崎建設の発表について)

- 災害現場の状況把握の最前線になっていただいております、ますます期待が高まる。
- 火山、海の地図作成には、人口衛星を利用した取り組みはやっているが、無人機を新たなツールの一つとして活用することが重要である。

【第4部 パネルディスカッション「地域建設業は想定外の災害にどう備えるか」】

パネラー：全日本建設技術協会会長・土木学会会長 大石久和

林野庁次長 沖 修司

北海道空知建設業協会会長 砂子邦弘

コーディネータ：建設トップランナー倶楽部 代表幹事 米田雅子

- 砂子 ・我々空知建設業協会は先ほど事例を紹介した帯広地区の近くにある。北海道はめったに台風の上陸がないが、平成28度は3回の台風被害にあい、空知川が氾濫したことで甚大な被害が発生し、43社が24時間体制で災害復旧に取組んだ。
- ・空知川は過去氾濫したとはないから大丈夫ではないかと思っていた。
- 沖 ・近年、集中豪雨の被害が全国各地で多くなってきている。雨の降り方に変化がある様子だ。
- ・想定外の災害は台風や大雨だけでなく、火山の噴火や口蹄疫の発生などもある。どの災害復旧にも建設業者の支援が必要であり、建設業者が関係しない災害はないのではないかと。
- 大石 ・想定外と言わざるを得ない災害が多くなっている一方で、災害に対応する我々の「耐力」、「体力」が落ちている。
- ・災害救助法が成立した昭和22年における全国の高齢化率は約5%程度であったが、最近では約27%まで上昇している。これは、全国平均であるので、地方ではさらに高齢化率は高いと考える。
  - ・今後は都市部においても一層の人口高齢化が進展するものと考えられ、人口が多い地域における災害対応力が低下することが懸念される。
  - ・また、市町村の職員数の減少が著しい。特に技術職員が減少しており、災害時の対応が心配である。
- 米田 ・災害に立ち向かう建設業の力が落ちている中で、今後、何をすべきか議論したい。
- 砂子 ・空知建設業協会では、会員数が110社から66社まで減少しており、弱体化している。地元工業高校では土木科がなくなるような事態である。
- ・防災は1社や2社では対応できない。普段から地域内で災害時における対応について共通認識を持つ必要がある。
- 米田 ・大規模火災が発生した際に消火用の水が不足して、ミキサー車で水を運搬したと発表があったが、考えもしないようなことを現場で対応しないといけない。
- ・そのような中で人材が不足していくことは恐ろしい事だ。
- 沖 ・想定外と言っても、ある程度のところまでは危険を予測していないといけない。
- ・役割分担も必要で、行政は災害に関する基本的なデータを日頃から収集しておき、効率的に人材、機材を投資できるように備えるべきだ。
- 大石 ・東日本大震災の時に、町長が行方不明になり災害対応の指揮がとれない、という事があった。海外では権限のある者がいない、決まらない場合は前任者が指揮するなど、非常事態の代行役を決めている。
- ・我が国では、想定外の災害を想定することがなかなかできない。過去の災害を教訓にして、ルールづくりなどをしてきたらどうか。

米田 ・確かに非常事態に備えた法整備は進んでいない。

東日本大震災時の環境省局長

・当時、廃棄物処理、除染の対応ため法律をたくさん作ったが、こういったことができる枠組みが、原子力災害対策基本法や災害対策基本法等にしっかり書いてあればよかったと、今は、考えている。

沖 ・農林水産省としては、ごみ対応のための国有地の提供等で迅速な対応を行うことができたが、なかなか全体でやろうということにはならなかった。

米田 ・非常時には、建設業はボトムアップで、現場が工夫しながら何とかやってきたということがあると思うが、もっとやりやすいように協定を結んでいく必要があると思うが。

砂子 ・中小の建設業が保有できるものは限られているので、レンタル産業との連携は非常に大切。応急復旧の際などは、企業の体力が非常に必要。人材確保は大きな課題だが、これがなければ地域を守りきることはできない。

大石 ・建設業は必要不可欠な産業であるということが社会に浸透していない。地域にどのくらいの建設業が必要なのか提示していく必要がある。建設業がなくなると困るんだということを国民全体のコンセンサスとしていく必要があり、そのための手法が開発されなければならない。

米田 ・地域維持型共同受注を日本で初めて行った佐久間さんいかがか。

佐久間建設工業（福島県）佐久間氏

・企業の体力を維持していくためには、工事量の確保は必要であることはみんなで考えていかなければならない。

京都大学名誉教授 嘉門氏

・地域を守るのは地域の建設業だということが、外の世界に理解されていないことが問題。生き残れる最小限のところをどう確保するかが一番の問題。協定を結んで機動的に業を支えていくことが重要かと思う。

九州大学名誉教授 小松氏

・ちょうど5年前に九州北部豪雨災害があり、24時間突貫作業を行っている現場に地元の方が来て感謝をしたということがあった。地場の建設業の生き残り策として、一次産業と地場の建設業が知恵を働かしお互いに生き残る方策を考えて欲しいと考えている。

砂子 ・ICTは武器の一つになる。自社の技術者もそういう形の施工をしたいと言っており、その技術を身につけたうえで地域を守っていくという意識付けを継続して行っていきたい。

沖 ・行政が地域のデータをきちんと示し、地域の方々、建設業者の皆さんと連携することが重要。

大石 ・大変な責任を持たされている市町村長をどう応援していくか。災害時だけでなく日常管理においても建設業が応援していく必要がある。そのためには単年度でなく中長期的な契約ができるように、法律も変わっていかなければならない。

## ○閉会の言葉

フォーラム実行委員長 小野貴史

- ・皆さま、国交大臣様、農林水産大臣様、各省庁の皆さま、学会の皆さま、同志の建設業の皆さま、本当に長時間ありがとうございました。
- ・地域建設業は想定外の災害にどう備えるかという事で、様々な方法があり、気付いたことは、



大事なことは心、想い、最後はやはり人だと実感できたと思います。

- 私ども建設業は、お金の為に働くのではなく、人々の幸せの為に、皆が勉強してきたことをどんなことでも生かせると思います。建設業は、真の総合工学であり、総合的に勉強をしたことが最後にはどこか建設ということに統合できると考えます。
- フォーラムの意義は、想定外のことを考えながら、色々な方と研究して、色々なことを仕入れることができる。やるべきことはまだまだいっぱいあるので、地域に戻って、色々なことをやっていこうと心新たに思います。
- また来年も是非お越しください、また勉強して、繋がりを強固なものにして、私たちの仕事が社会の中に意義あるものだと発信をしていければと思います。
- ひとつよろしくご厚意申し上げます、閉会の言葉にさせていただきます。

